

被災地の子どもたち、政府官僚に思いをぶつける！

銀山中学校の各学年では校内弁論大会に向けて学級審査が行われている。既に審査が終了し、それぞれの学年の代表者も決まったようだ。‘大人の期待に応える’ ためでなく、今の自分が訴えたい本当のことを是非、声に出して表現して欲しいものだ。大人は子どもに本当のことを言われるのは怖い。なぜ怖いのか？ごまかしがばれてしまうからだ。自分さえもごましながら、やらざるを得ない矛盾の中で生きているからだ。せめて子ども時代ぐらいは本当のことを主張できる時代であってほしいと思う。声をあげることもできないまま自殺する子どもたちが後を絶たない。自分は悪くないのに自分の命で決着をつけないといけない・・・究極の自己責任の世界。学力競争主義、実力主義の横行の中で、共に生きる仲間・社会が果てしなく枯れ果てていく・・・そう言えば原子力行政も文科省が担当省庁だった・・・。

さて、原発事故の被災地の中学生は今どんなことを考え、どんな気持ちで生活しているのか？気になって探してみた。～ 以下 化学物質問題研究会サイトより ～

8月17日に衆議院第一議員会館多目的ホール(定員198名)で、「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」主催の「子どもたちの声を政府に届けよう！」集会が開催されました。福島の子供たちから託された40通の手紙を携えて福島からバスで来た子どもたち4人が、生の声を直接政府官僚らにぶつけ、手紙のコピーを手渡しました。

橋本加那さん (中学2年生 13才)

震災と原発事故から5ヶ月がたちました。今、福島県を離れて暮らす人は何人いるでしょうか？そして福島県に残って、窓を閉めた生活している人はどれくらいいるでしょうか？全国に避難している福島の人たちが、どのような思いで故郷を離れたのか皆さんに分かってもらえるでしょうか？

福島の子供たちがプールにも入れず、マスクをして登下校しているこの状況を安全だと言っている政府に、私はとても疑問を感じます。今まで法律で決まっていた数値を何十倍にも引き上げて、それが安全だと言われても私には信じられません。そんなやり方は、私たち中学生の間でも通用しないでしょう。

福島県民よりもお金の方が大切なのですか？大人が勝手に作った原発でなぜ福島の子供たちが被曝しなくてはならないのか、なぜこんなつらい目に会わなくてはいけないのか、これほどの事故が起きて、どうして原発の再開を目指すのか、私には全く分かりません。このような状況で総理大臣が変わっても良い国が作れるとは思えません。

私は6月に転校して、とても悲しい思いをしました。友達も泣いて別れを惜しんでくれました。そして私の前と後にも何人かの友達が転校していきました。こんな風にだんだん、みんながバラバラになっていくのは私たちにとても耐え難い悲しいことです。出ていった人も残っている人もお互いのことが心配でたまりません。ですから私たちが学校の友達とみんなと一緒に安全な場所に避難できるように真剣に考えてください。

そしてみんなが避難している間に、学校も田畑も森も山も川も、福島県全域を徹底的にきれいにする計画を立てて、それを実行してください。私の友達を、仲間たちを絶対に誰ひとり傷つけないでください。私たちが将来、本当に安心して暮らせるように、今できる最大限の努力をしてください。よろしくをお願いします。

このあと、政府派遣の官僚と子どもたちの質疑が行われた。本当のことを言われて自己防衛に終始するみじめな大人の悲哀の姿。どこか今の自分の姿とも重なるような・・・しかし、ことは命の生存の問題。人も含めて、あるていどの知性を有する動物は、「子どもの命を守ること」そのものを目的として生きている。それを忘れたとき、例え人であっても喜ばずでしかなくなる。



1. 子どもたちの訴え

▼内閣府原子力災害対策本部被災者生活支援チーム

今、いただいた声を持って帰って、できる限りのことをしたいと思う。訴えの中で一番強く感じたことは除染である。除染については、先週、政府としてしっかりと計画を立てていくということを表明し、8月中にその計画を皆様にしっかりと説明できればと今準備中である。

▼原子力安全保安院

支援チームとともに、対策本部の方で除染および前提となる原子炉の安全確保に努めている。

▼文部科学省大臣総務課

ご意見は、しっかりと担当部署に伝え、今後の対策に向けて最大限、尊重したい。

▼司会

子どもたちは除染をしてほしいとだけ言っているわけではない。どなたか、除染ではなくて、集団疎開についてどのような対策をこれからしていくのかお聞かせ願いたい。

▼文部科学省

先ずは原子力発電所の安定、次に学校がきれいになるように、頑張りたい。

▼橋本加那さん(中学2年生 13才)

学校がきれいになれば、安心して帰れるというわけではない。安心できないから、このように手紙を書きました。

▼文部科学省

もちろん、学校がきれいになるだけでは安心できないという気持ちは分かります。ただ一方で、皆さんは朝から晩まで学校に通う時間が長いということで、先ずは、学校をきれいにしなくてはいけないというのが仕事の進め方です。できることからひとつずつ、やっていきたいのでご理解ください。

▼橋本加那さん(中学2年生 13才)

きれいにするという考えがあったなら、なぜ早くやらなかったのですか？(回答なし)

▼生活支援チーム

先週、いろいろ政府で決定したと説明しましたが、その中で、帰れるようにするためにはどうしたらよいかということで、文科省から話がありましたように、原子炉の安全が確保されることが大前提です。その次に除染でききれいになる。その次が生活インフラであるということを示させていただきました。

▼子ども：どうして早くやらなかったのかと聞いたのです。

▼役人：我々としては最大限、早く取り組んできたと考えています。

▼子ども：最大限とはどういうことですか？

▼役人：最大限というのは予算がついたり、必要な関係機関との調整がついたり、それへの時間がどうしてもかかってしまうので、できるだけ早くするという方針を決めて行くことが最大限ということです。

▼子ども：集団疎開の話がでしたが、その答えがまだありません。

▼役人：集団疎開は、我々の方では避難ですが、そこは土地の線量をしっかりと計った上で、必要に応じて避難区域を設定しているのが、ベースとなっています。学校単位といったところでは、先ほど文科省さんがご説明なされた通りであると認識しております。

「安全なところにみんなと一緒に避難したい」と訴える子どもの声に、返ってくる答えは「原子力発電所の安定が何より最優先」としか言わない・・・この国の原子力担当者の中は、この期におよんでも命の問題は後回しのようなのだ。「子どもの命を守る」という動物に与えられた最大の使命を果たす意思がない ⇒ 動物としての役割を放棄 ⇒ 動物以下。この類の連中は何と呼ばれるのがふさわしいのか・・・デビルマン？ いや少なくともデビルマンは正義の味方、子どもたちのヒーローだった。生きながら死んでいる・・・ゾンビだ！

「原子力カマフラに飼われたゾンビ」とこれからは呼ぶことにしよう。

自分も文科省に飼われたゾンビにはならないようにしなければ・・・やばい！通報制度が・・・